

季刊「古代史ネット」

創刊号



大分県日田市出土の金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡(国重要文化財)
(きんぎん・さくがん・しゅりゅうもん・てつきょう)

季刊『古代史ネット』 編集委員会

創刊号 巻頭言

河村哲夫

令和2(2020)年10月1日に日本古代史ネットワークが設立された。役員が選出され、重点的に取り組むテーマが採択された。

- 1.日本人の起源
- 2.弥生・古墳時代
- 3.邪馬台国論
- 4.科学的年代測定法とその適用
- 5.日本書紀・古事記・風土記の世界
- 6.大陸との交流

の6項目である。

1の「日本人の起源」については、DNA鑑定技術の進歩によって、「アフリカ起源説」がほぼ世界的な共通認識となった。現世人類は、アフリカから全世界に広まったとする説である。日本には約4万年～3万年前ごろに到達した。100万年前まで遡及した日本の「旧石器時代」は一体何だったのか、改めて日本の研究水準が疑われる。

それはともかく、DNAという科学的情報を基礎にした日本人の起源を議論すべき新しい時代に突入し、理科系的な発想への転換が最重要課題になっているにもかかわらず、考古学界の中核にいる研究者は文科系が大多数である。略歴をみると「文学部史学科」がほとんどである。こういう人たちがDNA情報を正しく読み取ることができるのか。こういう基本的な課題を正しく認識しているのか。このような構造的な問題を抱えている状況のなかで最も重要なのは、科学的な情報を正しく認識しうる人材の育成と体制の強化であろう。

2の「弥生・古墳時代」も同様の問題をはらんでいる。「炭素14年代法」あるいは「年輪年代法」という「新しい科学的な方法」とやらで、弥生時代の始まりが大きく遡り、土器編年等に基づく古典的な手法が遺棄されつつある。これらの動きを主導しているのは、邪馬台国近畿説論者を中心とした旧態依然とした考古学界の重鎮といわれる方々である。そこには中立的で公正な「第三者による検証」というものが欠落している。理系の世界では、世界中の研究者がよってたかって検証を行い、たとえば小保方氏のスタッフ細胞についても「客観的な再現可能性」がないということでごみ箱に捨て去られ、世界中に恥をさらした。

ご承知のとおり、「炭素14年代法」は学界でのそのような検証もないまま、マスコミにリークされ、今では堂々と一人歩きしている。「年輪年代法」についても、その基礎データすら公表されず、客観的な第三者による検証もないまま、これまた堂々と一人歩きしている。かつては近畿説論者すら箸墓の年代は4世紀としていたはずなのに、今では3世紀の卑弥呼の時代の墓として堂々と一人歩きしている。しかも、膨大な国費を纏向遺跡に投入しつづけている。いったいこれは何なのか。考古学界の構造的な問題がその根底にあるのではないか。

3の「邪馬台国論」についても同様である。中立・公平であるべき国・公共体及び関係機関が堂々と「邪馬台国近畿説」の旗を振っている。行司が相撲を取っている。他の分野では考えられぬことである。何の根拠もなく『魏志倭人伝』の「南」を「東」に読み替えて、恥じることを知らない。かつては近畿説の重鎮であった門脇禎二氏の遺稿『邪馬台国と地域王国』（吉川弘文館）を読まれたことはあるのか。近畿説から九州説へと大転換された真実の声がそこには痛々しいまでの筆致で記されている。

4の「科学的年代測定法とその適用」という問題。これは上記したすべての分野に共通する横断的で最も重要な問題である。この世のすべては、時間と空間という基本的な形式のなかで生成する。歴史もまた時空という座標軸のなかで記される。この基本中の基本であるべき座標軸を軽々しく動かしているのが現在の考古学の最大の課題ではないか。全国の考古学施設で最も苦慮しているのがこの問題である。かつて先輩たちが苦心して掲示した各コーナーの説明板にどう対応したらいいのか。古典的な年代で書いたらいいのか、最新流行の年代で書いたらいいのか悩んでいる。世代間の静かな対立と混乱と動揺が考古学の現場でつづいている。

5の「日本書紀・古事記・風土記の世界」も極めて重要な問題である。

戦後これらは歴史の世界から追放され、記紀を論じるだけで戦前の「皇国史観の亡霊」あるいは「保守反動の輩」呼ばりされる時期もあった。論じるにしても、主観的な読み替えを行って自分の説を正当化する目的で使用されることも少なくなかった。『日本書紀』の記事を否定するためにのみ使用する人が少なくなかった。『魏志倭人伝』を右手に掲げ、日本の文献は足元に踏みつけて論じる人がほとんどであった。今でも基本的にこの風潮は変わらない。戦後80年に迫ろうとする令和の時代に、このようなことを続けていいのか。戦後の総決算は、歴史の分野で行われてこそ、戦後は終わる。記紀など日本文献の復権こそ、新しい時代の燭光となる。

6の「大陸との交流」も極めて重要な問題である。たとえば日本人も日本語もアジアで孤立したものではない。日本の歴史ももちろん孤立したものではない。大陸との相互交流のなかで形成されたものである。日本は島国であるために一見孤立的な要素が強いように見えるが、基本的な骨格は大陸との交流のなかで形成されている。このような俯瞰的な観点を絶えず意識しながら、日本の歴史をとらえる基本的な姿勢が必要不可欠である。

以上の6項目の重点テーマを掲げて、日本古代史ネットワークが船出した。

いずれにしても、日本の古代史全般に関わる多角的・総合的な検討をめざすもので、客観的・科学的・実証的な観点到立脚した新しい総合的な古代史の実像に迫ろうとするものである。

この試みを達成するためには、多くの方々の叡智を結集するしか方法はない。そこで、本会では本会の会員か否かを問わず、広く古代史に関する論文を募集するとともに、応募された論文のなかから、優秀な論文について、季刊「古代史ネット」に掲載することとしている。

いろいろな分野からの、多くの方々のご参加による、いろいろなテーマの論文をお願いしたい。

○日本古代史ネットワークの役員体制等

理事：鷺崎弘朋、丸地三郎、河村哲夫、山内千里、野口和夫、浅野 登
川崎日香湮、石合六郎、尾形慎一、愛川順一、木原 昇、緒方淑子
(以上 12名)
監事：黒河 昭一 (以上 1名)
会長：鷺崎弘朋
副会長：丸地三郎 (東日本担当)、河村哲夫 (西日本担当)
事務局長：丸地三郎 (兼東日本担当事務局長)
会員管理担当：野口和夫
(兼)西日本担当事務局長：緒方淑子
解明委員会：担当 丸地三郎・鷺崎弘朋

目 次

巻頭言河村哲夫
日本古代史ネットワーク 設立総会のこと丸地三郎
緊急レポート!! 炭素14年代：国際較正曲線INTCAL20と日本産樹木較正曲線JCAL鷺崎弘朋
年輪年代法の弥生古墳時代100年遡上論は誤り鷺崎弘朋
記紀神話を歴史として読む丸地三郎
【I】卑弥呼の鏡——金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡を中心として河村哲夫
【II】天照大神の鏡——八咫鏡を中心として河村哲夫

日本古代史ネットワーク 設立総会のこと

事務局長 丸地三郎

“古代史の解明”を目指す『日本古代史ネットワーク』の設立総会は、2020年10月1日 午後東京の池袋にある「としま区民センター」の会議室で開催され、活動のスタートを切ることができました。

2020年は、コロナ禍で様々な活動が規制され、設立の準備も、人が集まって打ち合わせることも、怖くてできませんでした。その中で、代表発起人3人で、オンライン・ビデオ会議を採用し、打ち合わせを開始しました。 コロナ禍で、テレワークが大流行ですが、70歳をとうに超えた老人達にとっては、コンピュータ・通信の新しい試みは、“決断”が必要でした。 Zoomが何であるも知らずに「簡単ですから！」と云う言葉に後押しされて、切実な必要に押されて、九州・東京・埼玉と離れた地域から、始めた。

意外とスムーズにスタートし、打ち合わせを重ねてみると、ビデオ会議の良さも発見しました。 会則の検討に際し、修正をその場で行い、修正された文章を確認し、直ちに結論を出すことができました。 従来の人が集まって行う会議では、こんなにスピーディにできなかったことです。 現代のビデオ会議システムの効用をエンジョイ（活用）しながら、会議を重ね、設立総会に至りました。

2020年10月1日は、ややコロナの流行が収まったとは言え、多くの人が直接集まることには、抵抗がある時期でした。 そこで、設立総会でも、ビデオ会議システムが活躍しました。 池袋の会場には、7名が参加し、オンライン参加者が3名、メール委任状での出席が3名、合計13名が参加して、開催されました。 ビデオ参加者は、九州・中国地方・中信越のリモートの方々。

- 会の進行は代表発起人の一人の丸地が「開会を宣言」、「日本古代史ネットワークの会則」、「役員案」が提示され、了承された。

- 選出された鷺崎会長が挨拶を行い、下記のことを強調した。

「古代史の解明」

「ネット時代、最新の情報が、我々でも手に入る時代になったこと」

「解明の熱意」

「叡智」

そして、下記重点テーマに取り組むことを表明した。

1. 日本人の起源
2. 弥生・古墳時代
3. 邪馬台国論
4. 科学的年代測定法とその適用
5. 日本書紀・古事記・風土記の世界
6. 大陸との交流



鷺崎会長の挨拶 : 会長と参加者の向きは、おかし
いと感じるが、参加者はプロジェクターで投影される
会長を見ている。

- 活動方針・活動予定の報告とされ、了承された。

その中で、以下のことが表明された。

- ◇ 全国レベルで、古代史に興味を持つ個人と古代史にかかわる団体と共に、古代史の解明を目指す。
- ◇ 参加型の古代史解明を目指し、会員の参加を得て、解明委員会を運営し、解明に取り組むこと。
- ◇ 戦後、歴史から排除されてきた古事記・日本書紀の神話を取り上ること
- ◇ 多様な学問分野をバックグラウンドを持つ人々と、多様な学問分野を利用し、解明する。

以下の活動予定が提示された。

- ◇ 設立記念講演会 (2020年11月21日) 東京会場：きゅりあん (大田区・大井町)

パンフレットを画面に写し、紹介。 講師・演題は下記

- ✓ 記紀神話を歴史として読む 丸地三郎

✓ 邪馬台国九州説の展望 河村哲夫

- ◇ 東日本地区：解明委員会
 - ・ 古代史研究の方法論 (2020年12月) 東京
 - ・ 日本人の起源 (2021年 1月) 東京
 - ・ 弥生時代から古墳時代 (2021年 2月) 東京
 - ・ 邪馬台国論 (2021年 3月) 東京
- ◇ 西日本地区：解明委員会
 - ・ 炭素14年代測定法の問題点 (2021年3月) 福岡
 - ・ 邪馬台国への道 (2021年3月) 福岡
- ◇ 講演会
 - ・ 特別講座「日本人の起源」 (2021年2月10日) 福岡
アクロス福岡 講師：丸地三郎・河村哲夫
 - ・ 特別講座「古代史を取り巻く諸問題」 (2021年2月24日)
アクロス福岡 講師：丸地・河村・鷲崎弘朋
 - ・ 古代史サミットin佐賀 ～徐福を考える (2021年2月25日)
佐賀 中川副公民館
- 予算案が提示され、承認された。
- 特別会員の承認 この時点で、特別会員の申し込みのあった申込者について、入会の可否が諮られた。
経歴や著書が紹介され了承された。
- 出席者の自己紹介/紹介
池袋の会場から、7名が、ビデオで3名が、会議室とオンライン参加を織り交ぜ実施された。
ビデオ出席の九州・河村副会長から出席していない九州の三人について紹介が行われた。
紹介から、バックグラウンドとして、理科系・技術に強い人が多いことが、印象に残りました。



- 出席諸氏からの意見・アイデア提示を求めた処、
 - ◇ HPについての意見が色々出た。
 - ・ ホームの頁に関して、画面構成が殺風景との声アリ、改善を図ることになる。
 - ・ 画家の川崎さんに絵をご提供いただければ？との提案が出て、承諾を得た。
 - ◇ SNSを積極的活用の提案。 Facebookの取り扱い方法と有効性の紹介があり、活用すること、さらに、情報化・オンライン化に注力するよう提案があった。

設立総会は、終了した。

終了後は、近くのビアガーデンで、会場出席者6名で、2時間弱の懇談会を楽しんだ。九州、愛知からの参加者も有り、皆さん、コロナ禍で、顔を合わせて語り合うことは、本当に久しぶりと、初対面同士で、歓談した。古代史論議が盛んになった処で、会の発展を願って、散会。

『付記』

コロナ禍で「設立総会」の開催も危ぶまれる中、実施でき、幸いでした。 沢山の団体の方々と一緒に設立スタートしたいとの希望もありましたが、人と人が直接会うことが許されない空気の中では、それは、物理的に困難でした。 テレワーク（離れた処で働くこと）が可能になった人達からスタートせざるを得なかった。

熱意をもった人達の参加を得て、少人数でもスタートして、少しずつでも活動を開始して行くことにしました。コロナ禍で、動きが規制される中でも、徐々に、徐々に動き出すことにし、活動を通じて、個人・個人や古代史の団体との知己を広げて、「古代史解明の輪」を広げて行くこととしました。

『小さく生んで大きく育てる』 こういう会・団体について使うべき言葉ではないかも知れませんが、こんな方針でスタートいたしました。「知らなかった。」、「声が掛けてもらっていない。」などと叱責の声があるかも知れませんが、ご容赦頂ければ幸いです。

会の活動がスタートし、記念講演会のPR等を始めたことで、一か月で（10月中に）、会員申込者が、55名になり、反響の大きさに、驚いている所です。

皆様と一緒に「古代史の解明」に取り組んで行きたいと思います。
参加をお待ち申し上げます。

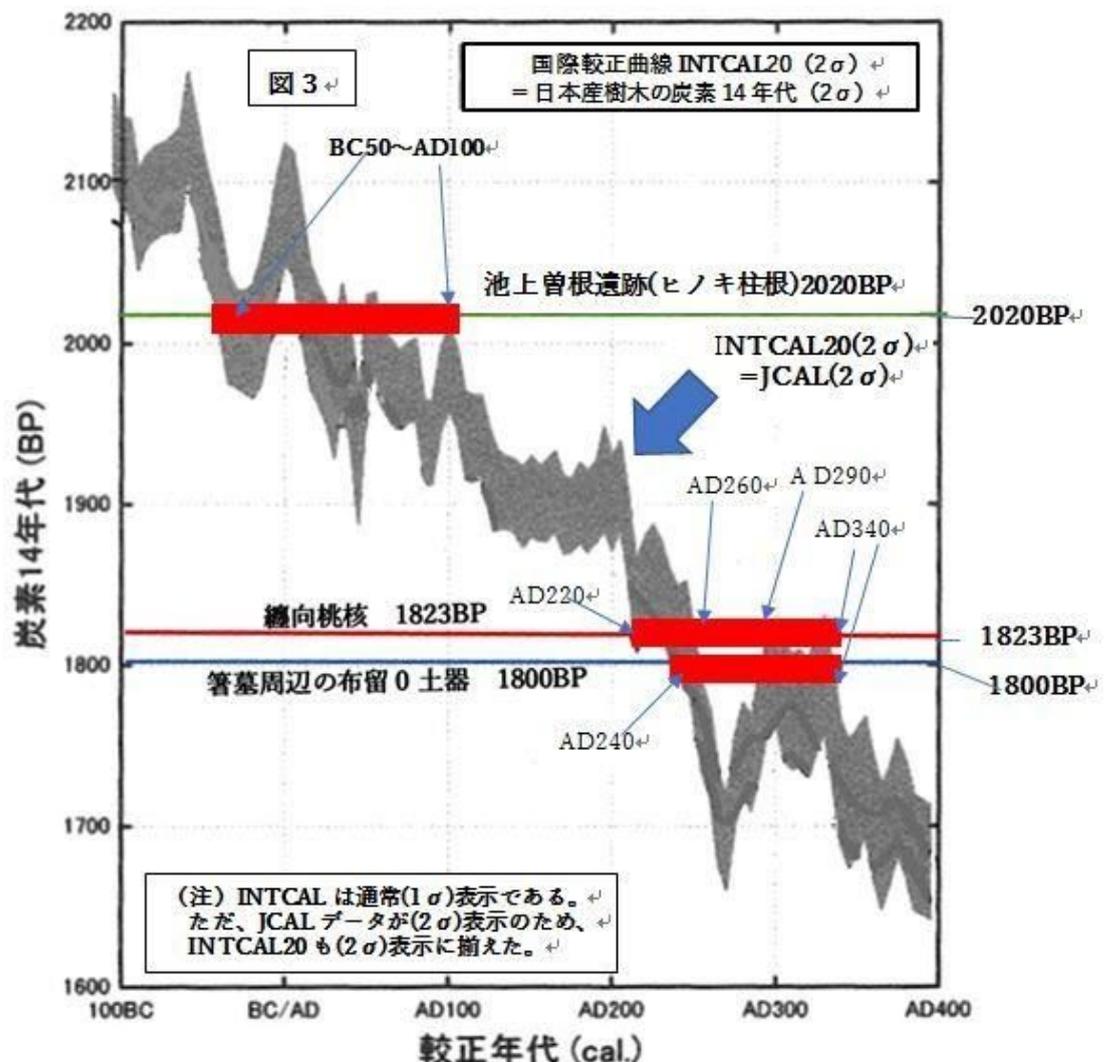
緊急レポート!!

炭素14年代：国際較正曲線INTCAL20と日本産樹木較正曲線JCAL

鷲崎弘朋

最新の北半球の炭素14年代・較正曲線INTCAL20によると、紀元前後～AD450年頃は日本産樹木較正曲線JCALが基準となり、JCAL=INTCAL20としてほぼ統一された（2020年8月、歴博発表）。これにより、弥生古墳時代の年代観に大きな影響が及ぶ。

- 1 大阪府池上曾根遺跡ヒノキ柱根N0.12の最外年輪：**炭素年代は2020BP**
2020BPの実年代（較正年代＝暦年代）はBC50～AD100年、中心はAD1世紀前半頃で従来考古学通説と一致（図3）。大阪湾岸の海洋リザーバー効果も配慮すべき（遺跡は海岸から2km）。年輪年代測定値はBC52年伐採だが従来考古学通説と100年乖離し、従来通説（AD1世紀中頃）が正しい可能性が強い。
- 2 纏向遺跡大型建物跡の土坑出土の纏向桃核（名古屋大測定12個、山形大測定2個、合計14個の加重平均）：**炭素年代は1823BP** 1823BPの実年代は、AD220～AD260年あるいはAD290～AD340年（図3）。
- 3 箸墓周辺出土の布留0土器：**炭素14年代は1800BP**
1800BPの実年代はAD240～AD260年あるいはAD290～AD340年（図3）。箸墓築造年代の従来通説はAD300年頃～4世紀前半で、1800BPはこの通説と一致する。



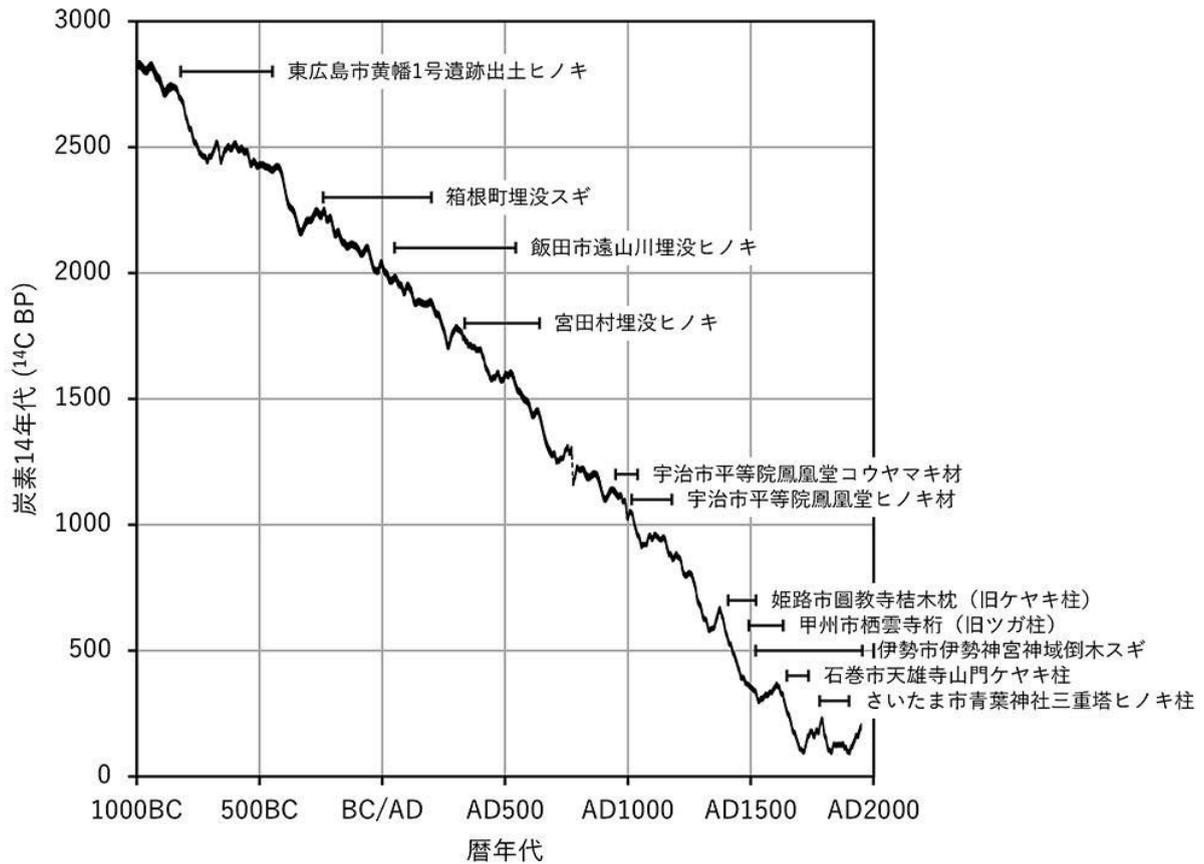
IntCa

炭素14年代法に欠かせない較正曲線の最新版「IntCal20」に、国立歴史民俗博物館が中心となって測定を進めてきた日本産樹木年輪のデータが採用された。較正曲線の形状が従来のものから変更され、なかでも**弥生から古墳にかかる時期が大きく見直された。**

【新しい較正曲線】

炭素14年代法では、較正曲線を用いて炭素14年代を暦年代に修正します。較正曲線は年輪年代法などで年代の判明した資料の炭素14年代に基づいて整備され、IntCalは日本を含む北半球の陸上資料に適用される汎用的な較正曲線である。

較正曲線は数年ごとに改訂され、2020年8月には多くの新データを反映した較正曲線「IntCal20」が公開されまた(Reimer et al., 2020, [DOI: 10.1017/RDC.2020.41](https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41))。前版のIntCal13較正曲線では福井県水月湖の過去1～5万年前の堆積物データが採用され、大きな話題となったが、それに加え、**IntCal20には初めて日本産樹木年輪のデータが採用された(図1)。**



日本産樹木年輪測定の取り組み(歴博発表)

国立歴史民俗博物館は、奈良文化財研究所、総合地球環境学研究所、東京大学、名古屋大学、山形大学、日本原子力研究開発機構などとの共同研究、ならびに科学研究費補助金による研究を通じ、20年以上にわたって日本産樹木年輪の炭素14年代測定を継続してきた。その過程で、西暦1～3世紀の挙動が従来のIntCal較正曲線と合致しないことを明らかにした。**今回のIntCal較正曲線の改訂は、日本産樹木年輪の挙動に合わせた形になった(図2)。**